

Heinz Vater: *Einführung in die Textlinguistik : Struktur, Thema und Referenz in Texten*

三 瓶 裕 文

今日、「テキスト言語学」は、認知心理学、語用論との学際的な交流を経て、テキストをコミュニケーションにおいて機能するものと捉え⁽¹⁾、コミュニケーションの過程 (Kommunikationsvorgang) や、話し手・聞き手の認知や推論のありようなど、テキストの「動的な」面に焦点を合わせた「認知的」な言語学に展開しつつある。

本書の著者 Heinz Vater は、生成文法やヴァレンツ理論、さらには時制や規 (決) 定詞についても多くの優れた論考を著しているが、本書「テキスト言語学入門」も著者の該博な知識に裏打ちされた、広い視野からの「テキスト言語学」の概説書となっている。

本書の鳥瞰図として各章の題目を挙げる。

1. Textwissenschaft-Textlinguistik-Text 「テキスト学—テキスト言語学—テキスト」
2. Textualität 「テキスト性」
3. Textthema und Textstruktur 「テキストテーマとテキスト構造」
4. Referenz in Texten 「テキストにおける指示」
5. Textsorten 「テキストの種類」

まず第1章では、「テキスト」に関わるさまざまな学問分野 (詩学、修辞学、神学、法学、文学など) における「テキスト」の捉え方を概説し、次いで、ある文連鎖を「テキスト」ならしめる基本的な二つの基準 “Kohärenz” 「結束性」と “Kohäsion” 「結束構造」を素描する。例えば次のような文連鎖である。⁽²⁾

T11 Es gibt niemanden, den ihr Gesang nicht fortreibt. Unsere Sängerin heißt Josephine. Gesang ist ein Wort mit fünf Buchstaben, Sängerinnen machen viele Worte.

この文連鎖は Gesang 「歌」—Sängerin 「歌手」、Wort とその複数 Worte の使用に見られるように、文法的・表面的な連関性、すなわち “Kohäsion” 「結束構造」はあるが、各文が意味的・内容的な連関性、すなわち “Kohärenz” 「結束性」を持たないので、テキストとは認定しがたいという。

冒頭にも触れたように、テキスト言語学の関心は、従来の、すでにできあがっているテキスト、いわば「静的」なテキストの分析というよりも、むしろある言語表現が使用される状況やテキストの発信者とその受容者の認知や推論というコミュニケーションの過程にある。

第2章では、そのようなテキストのコミュニケーション過程に注目し、Beaugrande/Dressler (1981) が、ある文連鎖をテキストたらしめる特性「テキスト性 (Textualität)」として挙げている基準を検討している。⁽³⁾ 以下の7つである。

1. Kohäsion 「結束構造」
2. Kohärenz 「結束性」
3. Intentionalität 「意図性」
4. Akzeptabilität 「容認可能性」
5. Informativität 「情報性」
6. Situationalität 「場面性」
7. Intertextualität 「テキスト間相互関連性」

その結論だけを述べると、Kohärenz, すなわち意味的・テーマ的な連関性がテキストを成立させるための最も重要な基準であり、他の全ての基準が満たされなくとも、Kohärenz が存在すれば、テキストとして認められるという。そして、このような Kohärenz の他の基準に対する優位性を、A. Lichtenstein の詩 “Die Dämmerung” 「黄昏」を例に示している。第一節のみ挙げる。

T26

Ein dicker Junge spielt mit einem Teich.
Der Wind hat sich in einem Baum gefangen.
Der Himmel sieht verbummelt aus und bleich,
Als wäre ihm die Schminke ausgegangen.

この各文は、前後の文と何ら表面的な連関性つまり Kohäsion はないが、「黄昏」というテーマが内容的な枠として詩全体を包み込み、意味的・テーマ的な連関性 Kohärenz を作り出しているのである。

第3章では、前の章で考察したテキストと非テキストの画定に関わる「テキスト性」の基準を踏まえて、テキスト内の語や文などの個々の要素(部分)間の構造、すなわち “Mikrostruktur” 「微視的構造」と、より大きなレベルのテキストにかかわる “Makrostruktur” 「巨視的構造」、またそれぞれのレベルでのテーマ・レマ構造についてのさまざまな論考を紹介している。ただ Vater 自身はマクロ構造やマクロ構造を導くマクロ規則のようなものや、マイクロ構造とマクロ構造の画定の基準などは問題が多く、また、いわゆるテーマ・レマ構造とテキストテーマの関係も今後の課題であるとしている。そこで、ここではマイクロ構造に関わることがらに絞って紹介するにとどめる。まずこれまでの Kohäsion に加えて、“Reim” 「押韻」や “Lautsymbolik” 「音象徴」を軸とする “phonologische Kohäsion” 「音韻的結束構造」のはたらきを Goethe の “Wanderers Nachtlied” を例に示している。

T28

Über allen Gipfeln ist Ruh,
In allen Wipfeln spürest du kaum einen Hauch;
Die Vögelein schweigen im Walde.
Warte nur, balde ruhest du auch.

木の梢の上へ漂うという内容を音でも表現するために、最初の二行では意識的に高母音だけ

が使われている。更に、明るい前母音/y/や/I/を、暗い後母音/u/と対照的に用いることで、軽さと重さの対立を表現している。後半では、中央の深い母音/a/が現れるが、それは、その位置のために中立的かつ調和的に感じられ、最後には再び鈍い/u/の音が現れ、静けさを音的に表現しているという。

Vater は、さらに、例えば *reif für die Schule* という句の後に *schulreif* という新しい造語が続くような“morphologische Kohäsion”「形態的結束構造」も挙げている。

文は通常、テキストの部分、構成要素として用いられ、孤立しては用いられない。テーマ・レーマ構造が文の連節、語句の配列に大きな役割を演じているのである。このことは次の例で a に続く自然な文連鎖が b であって b' でないことに見て取れる。

- (3-28) a Ich muß an einer Konferenz in Berlin teilnehmen.
 b Ich nehme das Auto.
 b' Das Auto nehme ich.

b' は次のような文に続くのが自然だという。

- (3-29) (Autoverkäufer :) Na, was sagen Sie dazu?

ある言語表現が言語外の対象を指し示すことを指示 (Referenz) と言い、言語表現が指示する対象を指示対象 (Referent) と呼ぶ。第 4 章で、Vater は、指示は主に意味的・認知的現象であり、実際の世界だけでなく、観念上の世界の架空の存在、私達の意識の中に「投影された世界」(projizierte Welt) も指示対象となりうるという立場をとる。ここでは時間指示と場所指示、同一指示に絞ってその概要を紹介したい。

時間指示 (Zeitreferenz) —— 出来事の時間的整理 (zeitliche Einordnung) —— は、昔から、哲学者、心理学者、言語学者の興味をそそってきた現象である。Vater は現在完了と過去完了はドイツ語の時制として捉えられるが、いわゆる werden による未来形は時間関係でなくモダリテートを表すとする。例えば次の例で

- (4-33) a Peter muß zuhause sein.
 b Peter wird zuhause sein.
 c Peter kann/könnte zuhause sein.

werden は語法の助動詞であり、müssen と können の中間の蓋然性を表すという。例証として、蓋然性が問題にならない、つまり話者自身の確定的な未来のことがらには werden 構文が使えないという事実観察がある。

- (4-35) Freitag habe ich Geburtstag/*werde ich Geburtstag haben.

なお、語用論的要因、グライス流の会話の含意が関わる過去時制の現象として、「控えめさ、確信のなさ」を含意する過去時制の用法が指摘されている。例えば次の 2 例である。

- (4-38) Herr Ober, ich bekam ein Bier. 「ボーイさん、まだビールをいただいでいないんですけど」

(4-39) Was gab es morgen im Theater? 「明日は何が上演されたっけ?」

場所の指示 (Ortsreferenz) の中心的領域は場所のダイクシス「直示性 (表現)」と見做すことが出来る。Vater は Bühler と同じく ich-hier-jetzt-Origo を人称-場所-時のダイクシスの座標系と捉え、話者、発話の位置、発話時を発話の基点とする。したがってトートロジー的な発話 Ich bin hier. は受信者が話者のいる位置を同定できない場合、例えば暗闇の中での発話ということになる。また、次の例で、a 文はそれぞれ b 文の意味で理解されるのが無標の解釈である。

- (4-42) a Ich habe Geld.
b Ich habe Geld hier.
- (4-43) a Peter kommt.
b Peter kommt hierher.

複数の表現が同一の対象を指示すること、すなわち“Koreferenz”「同一指示」はテキスト結束性の中心的構成要素である。ここでは、“Jesus ist von Köln beurlaubt”という見出しの新聞記事の中心人物 (Oberammergeau のキリスト受難劇に Jesus 役で出演するケルンの学生) をさまざまな同一指示的表現 “Zahnmedizin-Student/ein Wahlkölner/er/der bärtige Bayer” で言い換える過程を、ネットワークで図示している。

テキストの種類 (Textsorten) は、直観的にも把握できるものであるが、これをテキスト言語学の立場からどのように説明するかが第5章の主たる関心である。そして、テキストの種類は、その種類に固有な特徴の組み合わせによって分類される。

分類の基準としては、以下の三種が挙げられているが、③の基準を最も有効としている。

- ① 対象と目的設定による分類
- ② テキストに現れる部分テキストのタイプによる分類
- ③ コミュニケーションのありようによる分類

そして、「文学テキスト」に対峙するものとして、「実用テキスト」をとりあげ、コミュニケーションの観点から、実用テキストの種類を、主に次の3種の示差的特徴の組み合わせ：[±話された (gesprochen)], [±自発的 (spontan)], [±独白的 (monologisch)] に基づき例示している。例えば [+独白的, -話された, +自発的] という特徴の組み合わせから成る実用テキストとしては、親密な手紙、日記の書き込みなどがあたり、逆に [-独白的 (=対話的), +話された, -自発的] の場合は、学問的な議論があたるという。

なお各章末ごとに添えられた課題は、各章の内容の確認にとどまらず、各章で取り上げられたテーマを展開し、さらにより深い洞察を得るための問題提起という性格を持っている。答えが唯一的とは限らない課題が多いせいか、残念ながら、解答は付されていない。詩やことわざのテキスト分析の課題など、著者 Vater 自身の解を知りたい気がする。

以上、本書の内容を章ごとにかいつまんで概観してきた。もう少し突っ込んだ記述が欲しいと感じるところもあるが入門書という性格上やむを得ないことと思われる。全体として、さまざまな説に目配りの行き届いた記述と、随所に見られる著者独自の見解は、テキスト言語学の入門としても、さらには、認知言語学的な言語の捉え方、洞察を得るためにも有意義な書だと思う。

注

1. Vater による Brinker, K. (1988²) : *Linguistische Textanalyse*. Berlin. のテキスト概念の捉え方の解説 (S. 20 f.) 参照。
2. 引用例文に付されている記号・番号は原著のまま。
3. Beaugrande/Dressler (1981) : *Einführung in die Textlinguistik*. Tübingen. 訳語を付すにあたっては、『ドイツ言語学辞典』(紀伊國屋書店, 1994.) を参考に行っている。

Heinz Vater : *Einführung in die Textlinguistik : Struktur,
Thema und Referenz in Texten*. (München, Fink, 1992) 206 S.